

\*\*\*\*\* 論文 \*\*\*\*\*

## 愛知県におけるローカルな沖縄エスニシティ

— 地域性に作用する沖縄芸能「エイサー」 —

愛知県立大学大学院国際文化研究科博士後期課程院生

唐木健仁

### はじめに

日本の近代国民国家化の流れをうけて 1872 年から始まった琉球処分以降、国内外を問わず、沖縄県は多くの出稼ぎ移民を排出している。彼らの多くは移住先において県人会や同郷会などを設立し、様々な差別や経済的苦境を乗り越えてきた。現在においても、そのような団体は、組織構成や活動意義に変化をきたしながらも存続している。

それらの団体をローカルなエスニック・グループと位置付け、沖縄芸能「エイサー」に注目し、愛知県における沖縄エスニック・グループとエイサー団体の相互関係から愛知県における沖縄エスニシティの特性を明らかにしようと試みる。

現在、愛知県内には 10 団体以上のエイサー団体が存在している。また愛知沖縄県人連合会は 20 団体以上の目的別グループの集合体であり、県人会登録者は沖縄県出身者以外の登録者も含めて 2000 人を超える巨大組織である。このような巨大組織となった背景には 1960 年代以降の集団就職、高校卒業後の進学による移転、あるいは、近年、話題となっている自動車産業の期間従業員としての労働力流入などが要因として挙げられる。

進学や期間従業員などの若年層の流入はエイサー団体にも影響を与え、1990 年代以降のエイサー団体増加にも関与している。大阪市大正区や沖縄県沖縄市の事例をふまえ、愛知県と比較し、沖縄エスニシティの地域性に対して文化人類学的考察を試る。

### 1 本稿における沖縄エスニシティの視座

エスニシティ論の出発点は、政治的要素を背景に展開されているためその定義は研究者の数だけ存在するといわれている。文化人類学の分野における先行研究からエスニシティとエスニック・グループの定義を検討したうえで沖縄のエスニシティをどのように捉えるかを示したい。

N. グレイザーはエスニシティを「ひとつの共通な文化を意識的に分ち合い、何よりもまずその出自によって定義される社会集団」と定義している (N. グレイザー : 1975 :35p)。綾部はエスニック・グループとエスニシティを明確に区別している。エスニック・グループの定義として、「国民国家の枠組のなかで、他の同種の文化集団との相

互行為的状況下に、出自意識と文化的属性を共有する人々による集団」と考え、「エスニック・グループと、その性格やアイデンティティ、つまり民族集団の在り方の総体を示すエスニシティとを使い分けるべきなのである」とし、エスニシティの概念は認識現象の構成体であり、エスニック・グループは行動現象の構成体に近いものであると考えている（綾部：1993 13p）。綾部の唱える認識現象の構造体としてのエスニシティに近い考え方として竹沢も「エスニック集団あるいはその一部の構成員がそのエスニック背景に基づき意識的・無意識的に表す心理的・社会現象」とエスニシティを捉えている（竹沢：1994 13p）。

これらの定義を踏まえた上で、沖縄県出身者の共同体組織を「エスニック・グループ」として位置づけることが可能である。多くのエスニシティ研究は主に移民を対象に行われており、沖縄県出身者を対象とした場合には、ハワイや南米などが中心となっている。本稿は日本国の本土、特に愛知県に移住した沖縄県出身者をエスニック・マイノリティと位置づけている。

沖縄県出身者をエスニック・マイノリティと考える理由として以下の3項目を挙げる

- i 日本という国民国家の枠組のなかで、他の同種の文化集団との相互行為的状況下に、出自意識と文化的属性を共有する人々による集団である。
- ii 琉球王国固有の文化・歴史・言語（ウチナーグチ）などをもとにしてひとつのアイデンティティを共有する共同体的な集団である。
- iii 経済的理由などで沖縄県を去り、本土での生活を余儀なくされ、差別などで伝統文化や言語と生活様式の維持が困難となり、伝統を失っていても沖縄県の地に住む「沖縄人」と自らを同一視している。

また、県人会や芸能集団の活動は竹沢の「エスニック集団あるいはその一部の構成員がそのエスニック背景に基づき意識的・無意識的に表す心理的・社会現象」というエスニシティの定義に合致する。これらのことから県人会や芸能集団による行動現象をグローバルな多文化・多民族的エスニシティではなく、ローカルな「沖縄エスニシティ」として考察する。

## 2 「エイサー」について

大太鼓、締太鼓とよばれる小太鼓、パーランクーとよばれる小型片面太鼓、三線を弾きながら歌う地謡、手踊りやチョンダラーと呼ばれる道化役などの踊り手で構成されるエイサーは、一般的に祖先祭祀の行事と理解されている。

7月の旧盆の3日間に青年会のエイサー団体は夕方6:00頃から深夜2:00頃まで町内をエイサーしながら巡回する。この巡回のことを「道じゅねー」とよんでいる。最近は公民館から出発するところが多いが、なかには初日に地域の御嶽、拝所の順番で奉納演舞をしてから巡回をスタートする青年会もある。巡回の途中では市会議員宅や教育長宅などの

地元有力者宅とともに門中の本家も立ち寄り場所としていることから、青年会の行事となった今日においても僅かながら祖先祭祀の様相を残しているといえる。しかしながら、明確にエイサーと祖先祭祀をつなげる実証としては乏しい。

1956年コザ市（現：沖縄市）発足と共に「全島エイサーコンクール」開催されることによりエイサーの性質も大きく変化を始めた。コザを中心とした中部の各青年会が参加するこのコンクールでは、入賞を目指し、各青年会は衣装をはじめ、さまざまな演出を独自に工夫したため、芸能性が増加した。本来は地域に密着したエイサーであったが、観光資源としての価値増加や、地域から離れて誰でも楽しめるエイサーを目的とした創作エイサー団体の出現などにより、マス・メディアや観光客を媒体として、エイサーがなかった沖縄県南部や離島地域、本土、ハワイや南米などの海外に拡散し、7月から9月までの間は沖縄県内の各地でエイサーを取り入れたイベントが毎週のように開催される。

### 3 安慶田青年会の「道じゅねー」

本来の地域に密着した青年会のエイサーがどのようなものであるか比較のために2007年にフィールドワークを実施した沖縄市安慶田青年会の事例を紹介する。

青年会の活動は基本的にはボランティアであり、スナック・居酒屋などの開店祝い演舞のご祝儀、イベントの出演料、寄付などを運営資金としている。特に、旧盆に実施する「道じゅねー」は地域住民からの寄付金が期待できるため、祖先祭祀とともに、運営資金確保という点でも青年会にとって重要な行事である。

2007年の旧盆巡回（道じゅねー）は8月25日から27日の3日間行われた。巡回のスタートは18:00頃からであるが、夜食の準備や巡回中の水分補給用飲料水の準備などがあり、巡回前から非常に忙しい状態であった。

17:00頃から徐々にエイサーを踊る青年会メンバーが公民館に集まり始め、巡回ルートの確認や音響設備の確認などをおこなう。

巡回に先立ち、安慶田地区内の御嶽と拝所に奉納演舞を初日に行った。奉納演舞は長い間、行われてこなかったが、50歳代の青年会OBが「原点に戻って伝統を重んじることが大切である。」と発言したことをうけて復活した。

奉納演舞終了後、公民館に戻り、エイサーの隊列を組みなおして巡回がスタートした。三線を弾きながら民謡を歌う地方（地謡）を先頭に、旗持ち、大太鼓、締め太鼓、手踊り、飲



写真1 エイサーの身振りを真似る子ども

料水を積んだ軽トラックで隊列が形成される。隊列には、道路整理役の青年会 OB、寄付を集める比較的若い青年会会員と公民館スタッフなどが随行する。

巡回は、3日間かけて細かな路地までくまなく回り、10m間隔位で立ち止まり演舞を行うため、3日間とも深夜3時近くまで時間を要する。立ち止まって演舞する場所は、大口の寄付が期待できる地域内の有力者宅前だけということはなく、市営住宅の駐車場、道路の交差点、商店の前、寄付が期待できる家の前、さらには、入院患者がいる病院前などであった。また、スーパーマーケット、マンション、市議員宅の駐車場などで1時間ほど休憩をとる。会議用の机と椅子と軽食を積んだ2トントラックを青年会 OB が運転して登場し、休憩場所を設営する。

深夜にまで及ぶ巡回であるが、地域住民は非常に協力的である。深夜にもかかわらず子どもから老人まで家から出て、一緒になって踊ったり、差し入れをしたりして巡回を盛りあげる（写真：1）。また、3日間の巡回中、近隣民家からの騒音や、エイサー隊の巡回によって路地を通行止めするため、車両の迂回を余儀なくされるなど、通常であれば「迷惑行為」となるようなことに対して一切苦情を聞くことはなかった<sup>1</sup>。



図1 大阪市大正区は大阪湾内湾と川に囲まれた地域であり、大正区南部は区画整理以前、湿地帯であった。（大正区ガイドブックより引用）

#### 4 大阪市・大正区の状況（関西沖縄文庫の活動）

1935年の時点で、大阪市全体で3000世帯以上約29000人の沖縄県出身者が大阪市内に移住しており、大正区においては、850世帯以上約6500人が集住しており最大の集住地となっている。大阪沖縄県人会連合会は事務所を大正区に置き、沖縄古典芸能教室などの活動拠点としている。

当時、多くの沖縄県出身者が生活していた北恩加島地区は「クブングワー」とよばれる湿地帯で、そこにバラックを建てて集住していたが、区画整理にともない大正区内の各地に

<sup>1</sup> 巡回中の苦情はないが、安慶田小学校で行ってきた練習に対しては、市の条例で10時以降の活動を禁止されている。また、毎年、農連市場において複数のエイサー団体が集まってエイサー合戦をしていたのだが、今年から騒音を理由に警察から事前に実施しないように指導を受けた。

分散した。一時期、大正区民の 3 分の 2 近くが沖縄県出身者に相当し、鉄工所、製材所、煉瓦工場などに就労していた（水内：2001）（図 1）。

大正区には県人会組織とは別に「関西沖縄文庫」とそれに付随するエイサー団体「がじまるの会」がある。がじまるの会は 1975 年に、①沖縄青年は団結しよう、②集団・単身就職者の生活と権利を守ろう、③沖縄の自然を守り文化を発展させよう、をスローガンに「関西沖縄青少年の集い「がじまるの会」」として発足した。「がじまるの会」結成の背景には氏名、生活習慣を「日本」に「同化させられてきた先輩」の苦しみや、沖縄差別の現状を改善する手段として、「沖縄人」としてのアイデンティティを確立させることが目的であった。「がじまるの会」は大正区千島公園にて毎年 9 月中旬に「エイサー祭り」を開催している。

## 5 愛知県の状況〈愛知沖縄県人会連合会の活動〉

愛知県における沖縄エスニック・グループは、昭和 14 年に名古屋沖縄県人会が結成され、戦後、1945 年に再結成された。

これまでの聞き取りから判断するに、沖縄県出身者に対して大阪府のような深刻な人権問題はなく、県人会組織は比較的緩やかな構造であったように思われる。一時期、活動を中断していた時期があったが、1990 年に連合会形式を取り入れて活動を再開した。この時期はエイサー団体の設立が相次いだ時期と符合する。

現在、愛知県内には 10 団体を超えるエイサー団体が存在する。最も古いものは、トヨタ自動車への集団就職者が立ち上げた団体が前身となっている愛知琉球エイサー太鼓連（以下：太鼓連）である。現在の太鼓連の活動は、地域のお祭り、病院・福祉施設への慰問、商業的イベントやリトルワールドでの演舞などである。近年の構成メンバーは沖縄県出身者とヤマトンチュは半々であるが、県内エイサー団体のなかでは沖縄県出身者が最も多く在籍している団体である。

愛知県のエイサーの発展を時間軸でみていくと、初期段階は 1960 年代の集団就職者による同郷意識や仲間意識から発生したエイサーであるといえる。やがて、1990 年代からメディアや観光事業と歩調をあわせるように起こった「沖縄ブーム」に刺激されたヤマトンチュが加入することで、エイサー団体が急増し、徐々に同郷意識は薄れサークル活動的な意味合いが濃くなった。

## 6 大阪と愛知の沖縄系イベント

大阪で実施される主な沖縄系イベントは関西沖縄文庫と「がじまるの会」が主催する「エイサー祭り」と地元 FM 局、イベントプロモーター、新聞社が合同で主催する「琉球フェスティバル」がある。

関西沖縄文庫主催「エイサー祭り」は、低賃金でもよく働き、労働運動などに見向きもしない「従順な労働力」いう認識をもつ雇用者側への決意表明と、沖縄県人としてのアイデンティティを押し殺して生活を余儀なくされた沖縄出身者への感謝と激励の表現を目的として1975年に第1回が開催され、現在も続いている。

現在の「琉球フェスティバル」は、1995年にFM大阪開局25周年記念事業として再スタートし、大阪城野外音楽堂で再開された。1996年から「琉球フェスティバル」は毎年東京と大阪で開催されるようになり、1998年には名古屋、札幌、宜野湾でも開催された。

愛知県内の大きな沖縄系イベントは愛知沖縄県人会連合会主催「あいち沖縄祭り・毛あそび」、豊田沖縄ふれあいエイサーまつり実行委員会主催す「豊田沖縄ふれあいエイサーまつり」、イベント会社主催「オキナワフェスティバル クラブスタイル」の3つが挙げられる。

「あいち沖縄祭り・毛遊び」は10月下旬に開催される入場無料の沖縄県人会連合会主催の一大イベントである。名古屋港ガーデン埠頭において行われ、10:00から17:00までの7時間の間にエイサー団体、舞踊団体、民謡団体、オキナワポップスが各団体、約20分の持ち時間で出演している。「毛遊び」は沖縄の食文化・琉球芸能・沖縄のチムグル<sup>2</sup>・平和の心を愛知県内に発信し、ふれあいの場を提供することを目的として開催されている。

「豊田沖縄ふれあいエイサーまつり」は豊田沖縄県人会会長のH氏を実行委員長とする「豊田沖縄ふれあいエイサーまつり実行委員会」が企画運営し、県人会連合会主催の「あいち沖縄祭り・毛遊び」より長い歴史を持つイベントである

2007年から愛知エイサー連絡協議会に所属するエイサー団体のメンバーが実行委員として加わり、参加するだけのエイサー祭りから積極的に意見交換をしながら実施にいたっている。また、今年から豊田市、豊田市教育委員会、豊田市文化振興財団が後援していることは、このイベントの大きな転機と考えられる。

「オキナワフェスティバル クラブスタイル」はイベント会社主催で、名古屋パルコにあるライブハウスにおいて年3回程、開催されている。

## 7 各エスニック・グループの比較

1956年から始まった「全島エイサーコンクール」を契機に、観光資源としての新しい価値を得たエイサーは、沖縄県の観光事業強化の流れを受けて、「沖縄らしい芸能」として、日本国内のみならず、南米を初めとする移民先各地に拡散し、沖縄のエスニシティの表象となった<sup>3</sup>。

国内におけるエイサーの拡散は、沖縄文化の商品化を加速し、沖縄エスニシティの変化

<sup>2</sup> 真心という意味の沖縄方言

<sup>3</sup> エイサーの歴史的背景は重要視されず、画一的に「沖縄の盆踊り」という意味付けが拡散した。

に大きく影響している。エイサーに代表される沖縄芸能の商品化は、県人会に限らず、デパートで開催される沖縄物産展でのイベントなど様々な場面で実施される。

大阪・大正区、愛知県、沖縄市青年会の三者の事例を比較すると、それぞれのグループとグループを取り巻く社会環境への対応の違いが明らかになってくる。

コザ市（現：沖縄市）において開催された「全島エイサーコンクール」は、横の繋がりが希薄であった青年会エイサーを組織化し、復興に導いたのである。

また、「芸能の復興」という視点では、戦争によるエイサーの担い手の損失や、居住地や農地の強制収用といった問題を乗り越えて復興されたものであることと、当時、アメリカ軍政府統治下であることも踏まえれば、神戸や横浜の中華街でみられる華僑におけるニュー・エスニシティ<sup>4</sup>の類型と位置づけることもできる。

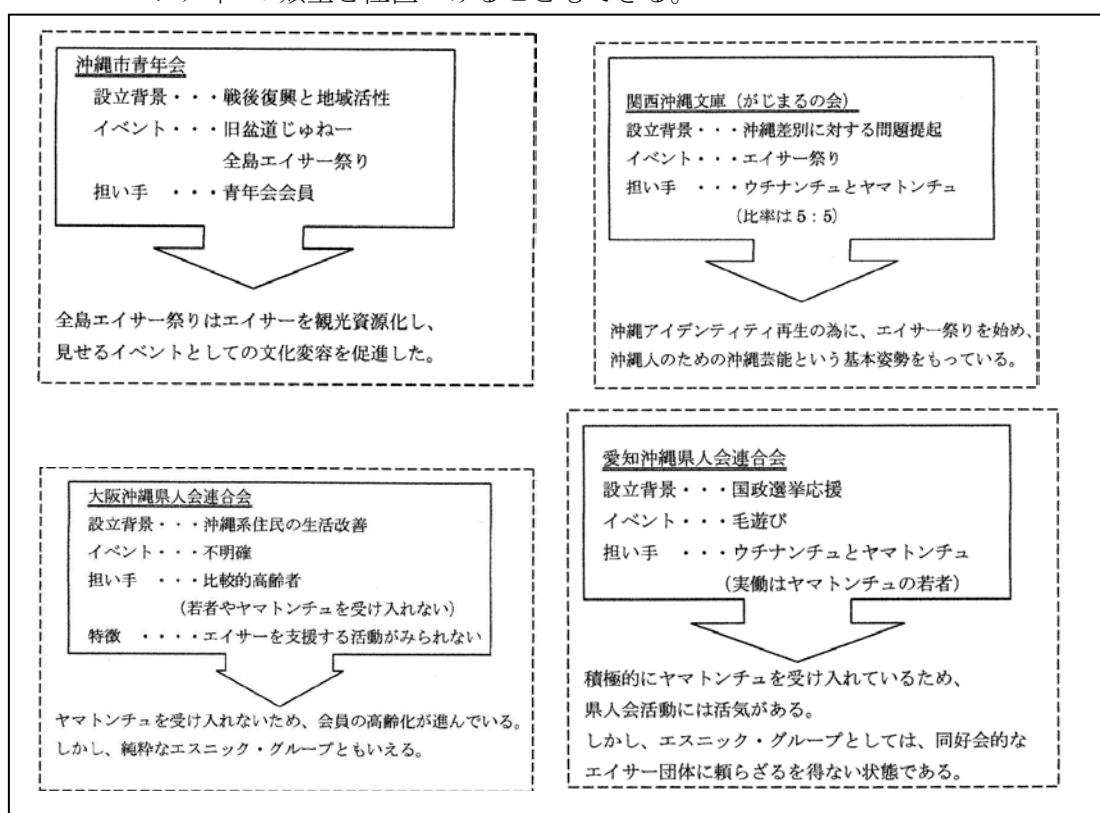


図2：エスニック・グループの比較

1920年代に移住してきた大阪・大正区における沖縄出身者は出稼ぎ労働者であり、劣悪な住宅環境と差別のなかで生活を始め、日常生活において、ヤマトンチュとの同化を図りながらも、必然的に相互扶助的な県人会組織を結成した。現在、大阪の沖縄エスニック・

<sup>4</sup> 江淵はニュー・エスニシティの定義を「民族間の通婚や混在による文化的融合が進む一方で、すでに消失したかのように見えた集団のエスニシティが再び顕在化してくる現象」と述べている。本稿の視座にあてはめると、沖縄エスニシティのなかで、その文化を担ってきた沖縄出身者が自らの手で「文化再生」をおこなうこと、といえる。

グループは、エスニック・アイデンティティの為に活動する関西沖縄文庫と、ヤマトンチュを受け入れないため、高齢化が進む大阪沖縄県人会連合会が存在する。エスニック・グループとしては、大阪沖縄県人会連合会は出自を条件とするエスニック・グループである。

一方、関西沖縄文庫はヤマトンチュを受け入れながら、ヤマトンチュと共に沖縄問題について考えていく姿勢を見せている。

愛知県は大阪と同じ時期から出稼ぎ労働者が存在した推測されるが、愛知沖縄県人会連合会ですらその実情を把握してはいない。愛知沖縄県人会連合会のエスニック・グループとしての特性は、1990年代以降の同好会的に設立された模倣性の高いエイサー団体を連合会へ積極的に取り込み、多くの愛知沖縄県人会連合会のイベントに参加させることを可能している点である。

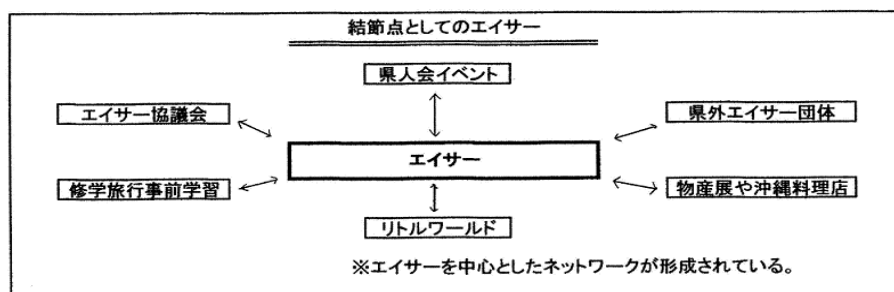


図3 結節点としてのエイサー

また、若者を積極的に受け入れている愛知沖縄県人会連合会はエイサー・グループを結節点としてエイサー以外の各グループの相互交流や積極的な活動を円滑にしている。そして、沖縄エスニック・グループだけのコミュニティの結節点にとどまらず、ヤマトンチュの商業グループや県外のエイサーとの結節点としての役割を果たしている（図3）。

## 8 考察

これまで、愛知県、大阪市大正区、沖縄市のエスニック・グループの状況についてエイサーを材料として観察してきた。これらを踏まえて、ローカルなエスニシティについて考察をおこなう。

N. グレイザーが1967年の中東戦争の際に、揺れ動くエスニシティについても指摘しているが、同様のことは大阪の関西沖縄文庫でも見られる。エイサー祭りも回を重ねるにつれ、初期のエイサー祭りほど原初的紐帯の要素は表に出てきていない。しかし、辺野古基地移転問題、教科書問題などに起因して原初的紐帯要素が表面化する。関西沖縄文庫はこのような一連の沖縄が抱える問題を取り上げることで、紐帯的結合を強くし、エスニック・グループとしての活動の核をつくり、無関心であった沖縄出身者を取り込むことが可能となる。原初的紐帯論的要素と道具主義論的要素のバランスが状況によって変化すること



は結果的にエスニック・グループの構成員や目的などの質的な面に影響を与え、エスニシティの流動性に関与していると考えられる。

しかし、愛知県の場合、ヤマトンチュが多く所属するエイサー団体の協力がなければ活動が成り立たない愛知沖縄県人会連合会であり、エスニック・グループとしては形骸化している傾向にあるため、紐帯論と道具主義論における流動性の論理は当てはまらない。

エスニシティの境界性についても事情が異なる。バルトは、『エスニック集団の境界』のなかでエスニック・グループを構成する上での重要な特性を、「自己による帰属と他者による帰属」とし、エスニック・グループの構成員の主観性を指摘している（バルト：1969 32 p）。負の社会的要因を背景とし、「ウチナンチュ・アイデンティティ」を強く意識する大阪のエスニック・グループと異なり、多数のヤマトンチュが所属している愛知沖縄県人会連合会では、エスニック・グループ内部からの視点において「沖縄人」と「日本人」との境界性は曖昧になる。また、近年の沖縄ブームの影響を受け、社会的な負の要因が減少していることや、沖縄エスニック・グループの「ヤマトンチュ構成員」が沖縄芸能を実施している様子も、外部から見た場合、エスニック・グループの境界が曖昧になる要因といえる。これらのことから、境界を通じてエスニック・グループの存在を明確にするバルトの「境界性の理論」も愛知県の沖縄エスニシティには当てはまらない<sup>5</sup>。

構成員の帰属に関する境界性を唱えるバルトに対し、コーエンは社会性に関する境界に注目している。コーエンはエスニシティの変化を、エスニック・グループ自身の同化や、他のエスニック・グループからの圧力、または、協調などの共同体の相互関係によって変化するとし、エスニシティは複合的な事象であり、心理的、歴史的、経済的、そして、政治的な要素を含むと考えている。さらにコーエンは、これらのエスニシティの背景を踏まえた上で、エスニシティの文化的事象、社会的力関係に存在する境界線が、組織を維持するものと考えている（COHEN：1974）。

また、カイズはエスニシティの変化について、アイデンティティの根本的な特性における文化的解釈と、客観的な利害関係の追及におけるエスニシティの社会的操作をふまえたアプローチの必要性を唱えている。移住などによる社会制度や法制度の変化などに対して、自らのエスニック・アイデンティティのとの調和を前提に、社会的適合を目的とした新しい行動規範を展開すると考え、社会環境とエスニシティの流動性の関係を示唆している（KEYES：1981）。

コーエンの境界性に対する考え方やカイズの社会性への適合を目的としたエスニシティの流動性に対する指摘は大阪市・大正区と愛知県の沖縄エスニシティの地域性を考える上

---

<sup>5</sup> 唯一、境界性が明確になるケースと言え、県民大会が行われた「教科書問題」の時ぐらいである。しかし、これは、愛知県のエスニック・グループというよりは、近代国民国家である日本における、「沖縄人」というマイノリティなエスニック・グループとしての活動であり、愛知県の特徴とは言えない。

で有効である。

大阪市大正区の沖縄エスニシティは沖縄県出身者の集住が顕著であり、労働環境や住環境も劣悪な状況のなかで生活を強いられ、共同体として相互扶助してきた歴史がある。それゆえに、沖縄県出身者同士の団結と「沖縄人」としての誇りを持ち、地域とのつながりを大切にし、エスニック・グループの規模を変化させながらも、原初的に「沖縄人」としての帰属意識を明確にし、境界を維持しているといえる。

一方、愛知県の沖縄エスニシティは大規模な沖縄県出身者の集住もなかった上に、大阪市大正区ほど沖縄人差別は表面化しなかった。エスニック・グループ形成期から緩やかにヤマトンチュとの調和路線を歩みだし、社会的適合の結果、新しい行動規範を構築したといえる。また、自動車産業グループの存在が、愛知県の沖縄エスニシティを特徴付ける経済的要素と考えられる。愛知県への集団就職による大量の労働力流入は、エスニック・グループの拡大と会社制度への協調を背景とした社会的適合という事例に表れる。

さらに、労働者階層の移動という視点をからエスニシティの境界性の変化を考察することができる。ライトが指摘するオールド・カマーとニュー・カマーの労働環境における事例を、自動車産業関連の労働市場と照らし合わせてみると、愛知県における労働者階層の変化も沖縄エスニシティの帰属意識に関係してくるように思える（LIGHT：1981）。現在、ニュー・カマーは日系ブラジル人に代表される外国人労働者であり、オールド・カマーの地位に沖縄県出身者が移動している。この階層性の移動に着目した場合、ヤマトンチュの視線から見た「沖縄人」に対する客観的な帰属認識は、「日本人だけでも“沖縄人”」から、日系外国人労働者と比較して、「日本人である沖縄県出身者」となり、労働環境における沖縄エスニシティの境界性はさらに不明確になっているのではないと思われる。

古典的エスニシティ論との検証も含め、ローカルな沖縄エスニシティの特性について考察してきた。多くの研究者が指摘するように、エスニシティの要因は複合的であるが、そのエスニック・グループの構成員のアイデンティティ及び帰属意識、経済的、政治的社会的背景、他のエスニック・グループとの社会的力関係、伝統芸能の機能などの地域性がエスニック・グループの特性に大きな影響を与えると考えることができる。

また、今後の課題として、1970年代は、エスニシティを考える上で「国家」を枠組として捉える傾向にあったが、近年では「国家より小さななにか」が枠組として考えられるようになっている。本稿の場合は、愛知県という一定の地域を枠組として捉えているが、考察していく過程において、例えば沖縄県出身者の受け皿となる巨大自動車産業を枠組として捉え、地理学的な枠組から脱出したエスニシティ論を展開する可能性を含んでいると考えられる。

#### 【参考文献】

- 綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂 1993
- 池宮正治「エイサーの歴史」24p 『エイサー360 度・歴史と現在』縄全島エイサー祭り実行委員会：沖縄市企画部平和文化振興課編 1998
- 江淵一公「日系アメリカ人の民族的アイデンティティに関する一考察」139p-202p 『アメリカ民族文化の研究 - エスニシティとアイデンティティ』綾部恒雄編著 弘文堂 1982
- 大正区役所『大正ガイドブック - まち案内人資料集一』 2007
- クレイザー、N.、D・モイニハン『人種のるつぼを越えて：多民族社会アメリカ』（共訳）阿部齊、飯野正子 南雲堂 1986
- 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容と補償運動による変遷』東京大学出版 1994
- フレドリック・バルト「エスニック集団の境界」1969 23p-71p 『エスニックとは何か エスニシティ基本論文選』青柳まちこ編訳 新泉社 1996
- 水内俊雄「大阪市大正区における沖縄出身者集住地区の「スラム」クリアランス」『空間・社会・地理思想』大阪市立大学 2001
- COHEN, Abner (1974) The Lesson of Ethnicity. Abner COHEN(ed.) *Urban Ethnicity*. Tavistock Publications
- GLAZER, Nathan (1975) ETHNICITY : A World Phenomenon Dialogue Vol.8
- KEYES, Charles F. (1981) The Dialectics of Ethnic Change. Charles F. KEYES(ed.) *Ethnic change*. the University of Washington Press
- LIGHT, van (1981) 'Ethnic Succession. Charles F. KEYES(ed.) *Ethnic change*. the University of Washington Press